



我が家のお米

桐生市立新里中学校 2年 井田 千晶

私の家には田んぼがあります。私の祖父から受け継いだ田んぼへ、会社員の父は、毎日朝と夜に水の調整に行きます。

「私たちが食べているご飯は、どのような思いで作られているのだろう。」

毎日田んぼへ行く父を見て、私の中に出てきた「問い」です。毎日田んぼに水を入れるため、わざわざ私服、スーツから、作業着に着がえて軽トラックに乗っていく。しかも、会社に行く前と帰ってきた後すぐに、私だったら、すぐにあきてしまうので出来ないことです。米作りと会社員を両立させてやっているのですごいなって思います。

私は「問い」に対する「答え」を探すため、父にいくつか質問し、その答えを少し簡単にまとめてみました。

うちの田んぼの面積は、大小合わせて33aあり、品種は作りやすい「ひとめぼれ」だそうです。また、米作りをしていてうれしかったこと、大変だったこと、やりがいを感じたことを質問しました。うれしかったことは、自作の米を家族で一年間食べていけることだそうです。大変だったことは、田んぼの手入れや世話が大変で、一人で管理することらしいです。やりがいを感じたことは、新米ができて、家族で食べたときに「おいしい」と、言ってもらえるときだそうです。

私は質問をしていて驚いたことがありました。田んぼのまわりの草を草刈り機で、稲と稲の間に生えていたら手で取る。しかし、収穫の時は同級生の方に手伝ってもらっているそうです。ほとんど一人でやっている訳ではないと分かりましたし、米作りの一つ一つの仕事は大切なんだと実感できました。

もう一つ、私が質問したことがありました。それが以前からいただいていた「問い」です。「どんな思いで米作りをやっているか。」

それについて、父はこう答えました。

「元々我が家は農家をやっていました。父がやっていた米作りを、いずれは自分が継ぐものと思っていました。収穫したお米は、我が家でも食べますが、他にも毎年買っていただけて、当てにしている親戚もいます。米作りは必ず必要な事だと思っています。」

確かに父が親戚の人などに売っている時を見たことがあります。しかし、父のお米が親戚の人に当てにされていたということは初めて知りました。父にとっても米作りは欠かせない事なのです。でも、親戚の人にとっても父のお米はおいしいから買いたい、という願いがあるのではないのでしょうか。それと同時に、お米の売買のおかげで今のような親戚の人と仲の良い関係になっているのかもしれない。だからこそ、その人たちとも良い関係をこれからも築くにも、お米は必要だと思います。

私は、この作文を通じて、お米の良さ、大切さ、育てるうえでの大変さをよく知るきっかけになりました。それと同時に、私が思っていた以上に米作りが大変な作業であるとわかり、新しく知ったことが増えました。

私は今まで父が、みんなの目に見えない所で、努力して米作りをしている事を改めて、くわしく知りました。きっと、私の祖父も、父が田んぼを受け継ぐ前は、今の父と同じような思いをして、米作りをしていたはずです。私にとって、米作りとは、みんなが笑顔で、喜んでお米を食べてもらうためにあると思います。